

---

- 私の守りたい物 -

しのぶ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

- 私の守りたい物 -

### 【Nコード】

N2204Q

### 【作者名】

しのぶ

### 【あらすじ】

和ちゃんはどうしてクラブに入らないで生徒会に入ったのかなあ？・・・難しいお仕事ばかりで面倒だと思っただけ・・・何もやりたい事がなかったのかなあ？

そうだ！ 直接聞いたら

いいんだよね！

「ねえねえ和ちゃん」

「ねえ、和ちゃんてどうして生徒会に入ったの？」

「何よ唯・・・急にそんな事聞いて」

「確か中学の時も生徒会の会長さんだったよね？」

「うん」

「高校に入学しても当たり前のように生徒会に入ったでしょ？ だから何か理由があるのかなあ〜って」

「そうねえ・・・」

「何かやりたいクラブとかは無かったの？」

「う〜ん・・・興味の持てる事はあったわよ、スポーツとか結構好きだし」

「じゃあ、どうして運動部に入らなかったの？ 桜高って運動部いっぱいあるのに」

「強いて言えば『他にやらなきゃいけない大事な事があったから』ってところかしらね」

「大事な事？ それって生徒会の役員にならなきゃ出来ない事なの？」

「自分の意見を言える立場と、ある程度その意見を通せる権力が必要だったし」

「和ちゃんって独裁者を目指してたの？！ 目を覚まして！ 和ちゃんには本当はいい子！」

「何バカな事言ってるのよ、そんな事考えてる訳ないでしょ」

「え〜！ じゃあ何がやりたかったのよお」

「私が生徒会に入ったのは『大切な物』を守りたかったからよ」

「大切な物？」

「たった1つだけど、絶対に失いたくない大切な物があるから・・・」

「へえ〜」

「まあ、生徒会の仕事みたいに『縁の下の力持ち』的な事が好きって言うのもあるけどね」

「そっか〜、和ちゃんは生まれた時から生徒会の会長さんになる運命だったんだね！」

「何よそれ・・・褒めてるの？」

でも知らなかったなあ〜・・・和ちゃんが生徒会に入ったのは守りたい物があったからだなんて。



「もう！ 訳分かんないよお！」

「お姉ちゃん……ここまでヒント言ってるのにまだ分かんないの？」

「え??？」

「和ちゃんの『守りたい物』と私の『守りたい物』は同じで……今私が見ているのは何？」

「……私？」

「大正解〜！ でも正確に言えば『お姉ちゃん笑顔』だね」

私の笑顔が和ちゃんの守りたい物？ 益々意味が分かんないよお・

困った顔で考えてると、憂が笑いながら話してくれました。

「私がお料理が好きだから覚えたんじゃないよ、お姉ちゃん笑顔が見たいから、喜ぶ顔が見たいから……だから美味しい物を作ってあげようって……そう思ってお料理を覚えたんだもん」

「そうなの？」

「お掃除もお洗濯も全部そう……お姉ちゃん笑顔を見るとね、凄く幸せな気持ちになるの……だからどんな事しても守りたい、壊したくないって考えちゃうの」

「憂・・・」

「だから和ちゃんも同じ事を考えてるんじゃないかな？」

「でも、憂のお料理とかは分かるけど、和ちゃんが生徒会に入るのは私にどんな関係があるの？」

「何言ってるのよお姉ちゃん・・・今まで和ちゃんが色々してくれてたのに全然気が付いてなかったの？」

「え?????」

憂がヤレヤレって顔で見てるよ・・・

でも私の為に生徒会の権力が必要だって言われても何も思いつかないよね。

「お姉ちゃん、試験の成績が悪くて何度か追試を受けた事あったでしょ？」

「えへへへ、まあね」

「その時、追試で合格点が取れなかったらクラブ禁止って先生に言われたでしょ？」

「うん」

「あれって、お姉ちゃんが100点取ったからメダタシメダタシってなったけど、もし赤点だったとしてもクラブに行く事は出来たの

よ

「え？ どうして？」

「和ちゃんが生徒会の意見として『クラブへの出入り禁止は生徒のやる気を阻害します』って職員室に申し出てたんだから」

「知らなかった・・・」

「他にも、軽音部のクラブ申請の時とか、講堂の使用許可を取る時とか、和ちゃんの個人的な配慮で解決してる事がいっぱいあるじゃない」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「もし和ちゃんが生徒会の役員じゃなかったら、軽音部はクラブとして認めてもらえてなかったかもしれないし、講堂でライブも出来なかったかもしれないし」

「そっか・・・そうだよな」

「もしそんな事になってたら、お姉ちゃん凄く悲しんだと思うもの」

和ちゃんが私の事を守る為に生徒会に入ってくれてたなんて・・・  
そんなの・・・一度も考えた事なかった・・・

時計の針は8時を過ぎてたけど、私は和ちゃんの家まで走って行きました。

「どうしたのよ唯、こんな時間に」

「和ちゃん・・・わだし・・・グス・・・」

「こんな所で泣いても仕方ないから、とりあえず私の部屋にいらつしゃい」

私は和ちゃんの部屋で憂に聞いた事を話しました。

「そう、憂が・・・やっぱりあの子は勘が鋭いわね」

「やっぱり和ちゃんは、私の為にずっとやりたい事も我慢してくれてたの？」

「バカな事言わないで！」

「だって・・・」

「勘違いしないでね、私はあなたと幼馴染だからって、そんな義務感だけで守ろうなんて思ってる訳じゃないわ」

「どう言う事？」

「むしろ、あなたの笑顔に助けられてるのは私の方なのよ」

「??????」

「私だって今まで、苦しい事や悲しい事は何度もあったわ」

「和ちゃんが？」

「当たり前じゃない、それこそ消えてしまいたいって思った事だって一度や二度じゃないわよ」

「そうなんだ・・・」

「そんな時、私はいつも唯の笑顔に救われてたのよ・・・あなたが傍に居て笑ってくれただけで心が温かくなって、もう一度頑張ろうって気になれたの・・・」

「和ちゃん・・・」

「だからあなたの笑顔はどうしても守りたかった・・・どんな事をしてあなたを悲しみは全部排除したかった・・・それは私の幸せの為でもあったから」

和ちゃんが私の事をそんな風に思っていてくれたなんて・・・嬉しい・・・

でも・・・だったらどうして・・・

私は新たな疑問が頭をよぎりました。

「ねえ、和ちゃん」

「何？ どうしたの真剣な顔して」

「和ちゃんはどうしてK大に行っちゃうの？・・・卒業したらもう守ってくれないの？」

「唯はもう強くなったから・・・軽音部のみんなと出会ってからは以前にも増して素敵な笑顔になったから・・・もう私の役目は終わりかなって・・・」

「そんな事ないもん・・・」

「唯・・・」

「私・・・一人じゃまだ何も出来ないもん・・・和ちゃんが一緒じゃなきゃ何も出来ないもん」

「唯！ 何言ってるのよ」

「和ちゃんと離れるのなんてヤダ！ 一緒の大学じゃなきゃヤダ！ ずっとずっと傍に居てくれなきゃヤダ！」

わがままを言ってるのは分かってるけど、どうしても涙が止まらないよお。

「もう、バカね唯・・・私達は昨日今日知り合った友達じゃないでしょ・・・ずっと一緒に歩いて来た幼馴染じゃない・・・大学が違いうくらいじゃ何も変らないわよ」

「のどがぢゃ〜ん!」

「それに将来唯の事を守ろうと思ったら、無理してでも上の大学を目指して検察官とか政治家とかもつと大きな力を手に入れなきゃね  
「!」

「……………」

「……………」

「和ちゃん……私が将来どんな凄い事引き起こすと思ってるの?」  
「……………」

「冗談に決まってるじゃない、すぐにツツコミなさいよ」

「もう、和ちゃん酷いよお」

「うふふ、ごめんなさいね……でも唯」

「ほえ?」

「私と出会ってくれて本当にありがとうね、唯のおかげで今まで幸せだったわよ」

「和ちゃん……私も和ちゃんと幼馴染で本当に良かった!」

私、平沢唯は素敵なお友達と可愛い妹と……  
そして大切な大切な幼馴染に囲まれて、と〜〜〜っても幸せです!

みんな大好き~~~~~!

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2204q/>

---

- 私の守りたい物 -

2011年1月17日08時08分発行